

# 「胡瓜で稼ぐ」という生き方

胡瓜が呼び寄せた縁

田代了三さんをリーダーとして、胡瓜栽培を勉強しようと集まった若者たちの集団「了三会」。

「当初は4名程度の飲み仲間。その集まりから、人が人を呼び、今では佐賀県内各所から農業への熱い思いを持ったメンバーが集うようになった。」

20代から40代と幅広い年代で構成されたメンバーは、経歴も様々。中には脱サラして就農した人もいる。

儲かる農業を目指す

全員に共通するのは、「先輩に学び、儲かる農業を目指している」という事。そのため、「時間があれば集まって、胡瓜栽培に成功している先輩農家を訪問し、現場で学んでいる。」という。

安心・安全をモットーに熱い思いでつづられている胡瓜。

「病害虫を防ぐため防虫ネットを張り、害虫の天敵となる虫によって農薬を使わずに防虫を目指す手法を取っています。」と語る田代さん。その結果、化学農薬の使用量（回数）50%以下に抑えて特別栽培農産物とし、付加価値を付けた胡瓜の栽培に成功している。

メンバー同士の情報交換や研修を重ねて生産効率を上げ、付加価値をつけることで儲かる農業化を実現。

こうして丹精込めて育てられた胡瓜は、単収も品質も県内トップクラス。

「触るのは一度だけ」という気の遣いようで朝採りされるため、瑞々しく新鮮なもの。

なぜ胡瓜なのか？

「胡瓜は農地面積当たりの出荷数量が高く、季節を問わずに栽培が出来ることから収益率が高く、チャレンジしやすい作物なんです。」と田代さん。

実際に了三会のメンバーの中にも、「胡瓜だから農業に思い切つて飛び込めた。」と話す方も少なくない。

「生育スピードも速く、自分がやった分だけ結果が見えやすいということがやりがいにつながる。同じように思いを持った農家同士で地域を超えて交流が出来る場があるのも、胡瓜農家ならではの良さだ。」という。

J Aさがみどり地区では、2年間の研修で胡瓜栽培のノウハウを取得できる「きゅうり」トレーニングファーム農業研修生の募集が行われている。胡瓜で稼ぐ生き方がここにある。



牛は身近な存在

武内町で親子2代で酪農業を営んでいる古川幸典さん。数々の乳牛の大会で優秀な成績を収めている。

乳牛に携わるきっかけは「小さい頃、家が乳牛の仲介をしていたので、牛は身近な存在だった。その牛に携わる事が仕事の選択肢の一つだった。」とのこと。

酪農講習所で1年間勉強をした後、単身で北海道の牧場で1年間の実地研修。「4月に行つて、気づけば紅葉の季節になっていた。」というぐらい、ほとんどを手作業で行う仕事に没頭。その時に、「酪農の知識や技術はもちろん、人生の糧となる経験を積んだ。」と語る古川さん。

研修が終わり、地元に戻ってからは、国の総合資金制度を利用し、牛舎を建設。今では親牛50頭のほか数頭の子牛を飼育されており、搾られた牛乳はJ Aを通じて出荷され、全国の消費者へと届けられる。

昔は多かった酪農家

今では町内に数軒となった酪農家。住環境が様変わりする中、「酪農業をす

## 地域と共に育つ農業

古川牧場 古川幸典さん

る上で、騒音や臭い、ハエといった問題は避けられない。周辺の方の理解は必要不可欠。地域に入つての気配りは欠かせない。」と地域との共存の必要性を語る。

「また、家族の協力、周辺の方の協力が無いとやっていけない。一人ではできない仕事。」その事をいつも念頭に置いて仕事に向き合う。

新規就農者への期待

「朝早く、夜遅い仕事で重労働。相手が生き物なので手を抜けない。だからこそ愛着が湧くし、やりがいがある。」そう語る古川さんは、新規就農者が出てきてくれる事を期待している。

「今がチャンスだと思う。やる気があればチャレンジして欲しい。ただし、やるからには、まずは基本が大事。必ず研修に行つて最低1年は体感したほうがいい。自分に合っているか分かるし、必要な知識や技術も学ぶ事ができる。牛の調子を判断するための経験を積む事もできる。」

終始笑顔で語られた古川さん。今日もラジオが流れる牛舎で、一頭一頭に愛情をもって作業に励む。

